

ハイエクにみる新自由主義と福祉国家の理念 ーケインズ主義批判を手がかりに¹

吉野 裕介

キーワード

ハイエク, ケインズ, 新自由主義, 保守主義, 福祉国家論

要旨

本稿の考察で明らかになったことは以下である。ハイエクの著作は、確かに 70 年代後半から 1980 年代においてもはやされ、かれの名前は再び有名になった。そこに、当時隆盛してきた新自由主義に思想的影響を与えた思想家という像を見るのはたやすい。しかしながら、かれの主張は、現実からある程度の距離を置いた、あくまで自由の諸原則に関するものである。具体的には、一般的ルールによる法の支配と、そのもとで人びとが自由に行動することを保証することに政府の役割を制限することである。

このため、ハイエクの自由主義は、「無政府主義」や「自由放任主義」もしくは「自由至上主義」というような、自由をどこまでも推し進めようとする思想とは一線を画す。かれの自由主義はあくまで原則として人びとに等しく与えられる「出発点としての自由」の重要性を述べたに過ぎない。そしてそれを設けるという目的の限りにおいて、政府の役割はある程度容認もするのである。

ハイエクのケインズ主義批判は、インフレーションの忌避、そして介入主義への批判として展開されたものであったが、実際の経済との結び付きを考えれば、ハイエクの批判はアメリカの経済および経済学へと向けられたものであった。このため、アメリカの「新自由主義」とハイエクの主張との結びつきは、それほど強いものではない。アメリカにおける新自由主義と、かれ自身の自由主義との直接的な結び付きを捉えるのは難しい。

また、アメリカの新自由主義は、保守主義および強い国家論と結びついていた。ただしハイエクの自由主義は、方向が必ずしも明らかでない場合にも、変化や修正を恐れない意味において、保守主義の立場とは異なる。さらに、かれの社会理論のなかでは、国家に対して主だった役割が与えられていない。なるほどかれの思想体系からすれば、国家の位置付けはきわめて微妙である。しかし、かれの思想において完成した国家論が見られないことで、ハイエクの自由主義は、ここで考える新自由主義 type II とは異なる思想だという解釈もまた可能になる。かくして、自由主義もしくは新自由主義の多義性から考えれば、ハイエクが（アメリカ的な意味での）新自由主義者かという疑問については、やはり違うと言わざるを得ない。